

「天の事柄」

～あなたに永遠の命が届けられるために～

ヨハネによる福音書 3章 8～15節 讃美歌 73、257

8 風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。雲から生まれた者も皆そのとおりである。」9するとニコデモは、「どうして、そんなことがありえましょうか」と言った。10 イエスは答えて言われた。「あなたはイスラエルの教師でありながら、こんなことが分からないのか。11 はっきり言っておく。わたしたちは知っていることを語り、見たことを証しているのに、あなたがたはわたしたちの証しを受け入れない。12 わたしが地上のことを話しても信じないとすれば、天上のことを話したところで、どうして信じるだろう。13 天から降って来た者、すなわち人の子のほかには、天に上った者はだれもない。14 そして、モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。15 それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。16 神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。

民数記 21章 4～9節

4 彼らはホル山を旅立ち、エドムの領土を迂回し、葦の海の道を通って行った。しかし、民は途中で耐えきれなくなって、5 神とモーセに逆らって言った。「なぜ、我々をエジプトから導き上ったのですか。荒れ野で死なせるためですか。パンも水もなく、こんな粗末な食物では、気力もうせてしまいます。」6 主は炎の蛇を民に向かって送られた。蛇は民をかみ、イスラエルの民の中から多くの死者が出た。7 民はモーセのもとに来て言った。「わたしたちは主とあなたを非難して、罪を犯しました。主に祈って、わたしたちから蛇を取り除いてください。」モーセは民のために主に祈った。8 主はモーセに言われた。「あなたは炎の蛇を造り、旗竿の先に掲げよ。蛇にかまれた者がそれを見上げれば、命を得る。」9 モーセは青銅で一つの蛇を造り、旗竿の先に掲げた。蛇が人をかんでも、その人が青銅の蛇を仰ぐと、命を得た。

■ 本論

ファリサイ派に属しながら、最高法院の議員であったニコデモという人物が、イエス様のもとを訪ねまして、神の国について、神のご支配がここにあらわされるためにお知恵を拝借したい、力を貸して頂きたい、どうやら、そんなお願いをしたようです。

そこから始まりましたニコデモとイエス様との対話を読み進めています。

前回到学んだところを少し振り返っておきましょう。

最初に、イエス様は、3節、「はっきり言っておく。人に新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」とお答えになりました。

イエス様としましては、「新たに」という言葉を、旧約の預言者たちが用いる「救い」という意味で言われた。すなわち、人は神様に救われなければ、ここに神のご支配があると見ることはできないんですよと、言われた。

が、ニコデモは、その使い方にピンときませんで、「年をとった者が、どうして生まれることができましょう」と、もう生き直すことはできませんと戸惑う。

これではいけないということで、イエス様は言い直されます。5節、「はっきり言っておく。だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない」。「新たに」という言葉を、「水と霊とによって」と言い換えられました。「水と霊」と言いますのは、預言者エゼキエルが、神様の御力をあらわすときに用いた表現でして、「新たに」というのは、神様に新しくしていただく、神様に救っていただくことなですよと、神様があなたを新しくしてくださるんですよと、教えられました。

ここにある「新しい」というニュアンスを、ヨハネによる福音書はギリシア語でもうまくあらわして、*「新たに (アノウセン ἀνωθεν)」*と訳されましたギリシア語には、「もう一度」という意味と、「上から」という意味とを併せ持つ単語が使われています。人は、上から、神から生まれさせられる。

それは、神のなさることです。今、救われる。今、新しくされるというように、自分でコントロールできるものではない。「風は思いのままに吹く」。神は自由なるお方として、わたしたちに聖霊の息吹を注いでくださり、新しくしてくださるお方です。

後から振り返って、「あの時」という信仰の節目はある。

けれども、それを手繰り寄せるということとはできない。それが、神のご支配です。

風は思いのままに、自由に、わたしたちに吹くのです。その時、新しくされる。

が、このお話も、ニコデモにはピンとこなかったようです。

彼はファリサイ派ですから、人一倍熱心に神の教えを守ること、信仰者の歩みを積み重ねてきた人物です。彼にとって神のご支配のなかに生きるということは、自分が積極的に神の教えを守り、従い、生きることでした。

それが、この地上に、神のご支配を実現させるということでした。

それは決して間違っていない。ただ、それがすべてではない。

そのことを誰よりも分かっていたのが実はニコデモのはずなんです。

でなければ、彼はイエス様のところに来ていないですよ。

神の教えを守って、従ってという信仰生活に平安があれば、イエス様のところに来ていないですよ。わざわざ訪ねてきたのは、その生活に平安がなかったからじゃないですか。神の教えを守ってということでは、神の国を見る思いがしなかったからじゃないですか。ですから、ニコデモは、イエス様のところに来たんですよ。

そうすると、イエス様は、神のご支配を見るためには、神様が何とかしないといけないと、神様があなたにそうしてくださると、神様の御心のままに、と言われる。

ニコデモとしては、そんな話、聞いたことがないわけです。

神の教えに従い抜く。その戦いを積み重ねる。それが彼のファリサイ派としての信仰生活でした。精一杯、より善く生きること、です。

それが、それも含めて神様のなさることだというのは、なんだか掴みどころがない、狐につままれたような話に、ニコデモにとっては聞こえたわけです。

そこで、9 節、するとニコデモは、「どうして、そんなことがありえましょうか」と今一度、問うことになります。

ニコデモという人はとことん率直な人柄であったことを思わされます。分からないことは分からないと正直に言える人でした。

福音書を読んでいまして、イエス様と、イエス様に語りかける人とのやり取りを幾度か見つけることができます。それは、大抵噛み合っていない。

当然なんです。神様の深い御心と人間の浅ましい考えとが噛み合うはずがない。

それで、たいていの場合、人は怒り始めます。あるいは、悲しみながら立ち去って行ったという人物もいました。これは人間の持っている、やっかいな性（さが）ですね。分からないことを分からないと認められないんです。

メンツが立たないことに耐えられない。

が、時々、このニコデモのように、そんなメンツをかなぐり捨てて、いやもっと軽やかに「どうして、そんなことがありえましょうか」と食い下がる人がいるんです。

この「どうして」というのは「なぜ」という疑問ではありません。

「どのようにして」という神の御業への関心を示す言葉です。

今まで、考えたことも聞いたこともない。が、神が人間を新しくしてくださるという、神のご支配を見させてくださるという、それはどのようにしてなのですか。

ニコデモは率直にイエス様に尋ねます。そのとき、対話は深まります。

イエス様は、どんどんと、ニコデモに語っていかれます。

あなたはイスラエルの教師でありながら、こんなことが分からないのか。

それでも、その場を立ち去らないニコデモに対しまして、はっきり言うておくと言葉を重ねていかれます。

神が人を救うということ、あなたたちは受け入れないかもしれない。

実際に、神がどのようにして人を救うのか、ということを表わされても、それを見たり、聞いたりしても、信じないかもしれない。

それでも、というようにイエス様は語られます。

神は、人をどのようにして新しく生まれさせるのか、どのようにして救うのか。

それは、「人の子」という救い主が、天に上ることにおいて、ということです。

13 節、天から降って来た者、すなわち人の子のほかには、天に上った者はだれもいない。

「だれもいない」です。「だれもいない」ですから、天にある救いを地上に実現できた人はいないんです。「人の子のほかには」。

神が人を救う方法は、まず、誰も成し遂げたことがない仕方です。人の子が天に上ることにおいて、です。それは、どのようにして、なのか。14 節です。

そして、モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。

ここにまでたどり着きました。「モーセが荒れ野で蛇を上げたように」。

イエス様は、民数記 21 章 4～9 節にあるお話を持ち出されます。249 頁。

荒れ野の旅を続けるイスラエルの歩みの最終盤にあたる記事です。

イスラエルは、ホル山を旅立ち、エドムの領土を迂回するかたちで、モアブの地に入っていくとされています。

しかし、旅の過酷さに、イスラエルの民はまたも耐えきれなくなりました。

そこで、5 節、神とモーセに逆らって言った。「なぜ、我々をエジプトから導き上ったのですか。荒れ野で死なせるためですか。パンも水もなく、こんな粗末な食物では、気力もうせてしまいます。」

このような不平不満を、イスラエルはそれまでも何度も口にしてきました。

聖書をよくお読みの方は、「またいつものやつだ」と思われるかもしれません。

しかし、二つの点で、この不平不満は、これまでのものとは決定的に違います。

罪が深まっています。

第一に、「神とモーセに逆らって言った」とあります。これまで、どんなに激しく汚い言葉がぶつけられるにしましても、それはモーセに対して、あるいは、モーセとアロンに対してでした。この時、初めて、「神とモーセに」というように、神様に直接、不平不満がぶつけられるんですね。この直前にあった、アロンの死も、影響があったかもしれない。ある不安定さの中にイスラエルは置かれていたかもしれない。

が、神に直接、罵りの言葉を向けるという、未だ踏み込んだことがない罪の領域へと、イスラエルは踏み込んでいったということになります。

もう一つは、「パンも水もなく、こんな粗末な食物では、気力もうせてしまいます」という言葉です。「粗末な食物」と、イスラエルは吐き捨てました。その「粗末な食物」というのはマナのことです。食べ物が無いイスラエルに、神が天から与えてくださった祝福の食べ物です。それがなければ生きてこられなかった。そして、食べたら「蜜の入ったウェファースのような味がした」（出エジプト 16 章 31 節）というような甘さがあった。心に潤いももたらしてくれた。それを「粗末な食物」と吐き捨てる。

そこにある神の祝福を、そこにある神のご支配の記憶を「粗末」であると、役に立たないと吐き捨てる。これほど罪深いことはない。人間が取るべきではない姿はない。

神への感謝も賛美も捨てたイスラエルの姿がそこにありました。

この罪の深まりの中で、神はもうモーセを通して警告を発するという事はなされません。直接、その怒りを、その悲しみをイスラエルに送られます。

6 節。主は炎の蛇を民に向かって送られた。蛇は民をかみ、イスラエルの民の中から多くの死者が出た。

「炎の蛇」と言いますのは、蛇のウロコが燃えるように真っ赤で毒々しいものであったのでしょうか。あるいは、その蛇に噛まれたら、猛毒のせいで燃えるように痛かった、火傷をおうように痛かったと考える方もいます。何より、「炎」というのは、神様がそこにおられるという御臨在をあらわし「しるし」でした。

ですから、神様は、御自身の怒りとして、「炎の蛇」を、猛毒をもった蛇をイスラエルの中に送られたということでしょう。

そして、その蛇に噛まれた多くの民が死ぬことになりました。

神の御怒りが直接に、イスラエルに臨んだのです。それは悲劇の記憶となるはずでした。が、その時、イスラエルの民が見せる独特の反応があります。それはこれまでの旅には見られなかったものです。7節。

民はモーセのもとに来て言った。「わたしたちは主とあなたを非難して、罪を犯しました。主に祈って、わたしたちから蛇を取り除いてください。」

「罪を犯しました」。

それはイスラエルの民が荒れ野の旅で初めてなす罪の告白です。これまで、泣き言を言うことはあれど、モーセに助けを求めることはあれど、「罪を犯しました」と自分たちの過ちを率直に認め、告白したことはありませんでした。

荒れ野の40年の旅は、この瞬間の、この告白のために重ねてこられたとも言える。

それほどに、ここは重要な場面です。

ここは、荒れ野の旅の中で最も罪が深まった瞬間です。

そして、最も率直な神への罪の告白がなされた瞬間です。

人生の危機は、人生の好機となります。神が逆転を起こされる。

その時、神はモーセに言われます。8節。主はモーセに言われた。「あなたは炎の蛇を造り、旗竿の先に掲げよ。蛇にかまれた者がそれを見上げれば、命を得る。」

モーセはその通りにします。9節。モーセは青銅で一つの蛇を造り、旗竿の先に掲げた。蛇が人をかんでも、その人が青銅の蛇を仰ぐと、命を得た。

イエス様が「モーセが荒れ野で蛇を上げたように」と言われたのは、この9節のことです。神様が御自身の怒りのしるしとして送られた「炎の蛇」を青銅で造りまして、旗竿の先に掲げる。それは、みんなが見るためです。どこからでも見えるようにです。

高いところに上げるんです。木につるして高く上げるんです。

それを見上げた者は、「命を得る」と、「生きる」と、神様は約束されました。

「炎の蛇」は、もともとは神様の怒りとして、民の間に送り込まれたものです。

それが、民の罪の告白を生みましたので、悔い改めのしるしになりました。

そして、それを見上げたものは「生きる」と言われましたので、赦しと命のしるしになりました。

「炎の蛇」はそれ自体、恐ろしいものです。おぞましいものです。

イスラエルの民の多くを死に向かわせた神の怒りなんです。

が、それをちゃんと見る者を、神は生かすと約束された。赦すとされた。

この蛇のように、「人の子も上げられねばならない」とイエス様は言われました。

そして、それが、神が人をどのように救うのか、という問いに対する答えです。

すなわち、人の子は、あの青銅の蛇のように、木に吊るされて、誰でも見えるように高く掲げられなければならない。すなわち、十字架に掲げられなければならない。

十字架は、神の御怒りのしるしです。人間に対する呪いです。

しかし、人の子が十字架で一身に、その怒りを受けるとき、その怒りは自分たちの罪が、神の祝福を「粗末な」と吐き捨てる罪が引き起こしたのを知るとき、ちゃんと知るとき、そこには悔い改めが生みだされる。罪の告白が生みだされる。

その罪を告白した者は赦されるんです。十字架を見上げる者は命を得るのです。

その十字架を見上げる者は、「蛇にかまれた者」です。

それはすなわち、罪の痛みを知っている者ということです。

蛇がもつ猛毒の、焼けるような痛みを知っている者ということです。

その者が、十字架を見上げるならば、命を得ると言われていました。

そして、イエス様は、「蛇にかまれた者がそれを見上げれば、命を得る」という民数記の言葉を、「それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである」と言われました。見上げることは、信じることだと。

十字架を見上げるということは、十字架の赦しを信じるということです。

その「信じる」ということのために、神はイスラエルの罪をも用いられますし、痛みをも用いられます。だれでも罪を犯し、失敗をします。しかし、「信じる」ために、神は失敗をも用いられます。神に立ち帰るチャンスにさえなされます。

イスラエルの民は、「炎の蛇」を通して、大変な苦難を経験しました。しかし、それは彼らと二度と同じ過ちを繰り返さないための恵み深い苦難であったとも言えます。

以来、彼らは生きるようになったのです。神と共に。

救い主たる人の子は、「炎の蛇」として、十字架に掲げられます。

誰もが見えるように。そして、誰もが神の赦しを信じられるように。

ニコデモはファリサイ派として、一所懸命に神の教えを守り生きる生活を送ってきました。それ自体は何も間違っていない。しかし、彼がまず気づかなければいけなかったことは、焼けるような罪の痛みです。神の教えを実は守れないんだという、守った気になっているだけで、体裁を取り繕っているだけで、実は神の御心を満たすことはできていないんだという絶望的な気づきです。その痛みです。

神の教えを守るということで、自分で自分を救うことはできない。

その痛みを知った者だけに、「炎の蛇」は、神の赦しの「しるし」となります。

そこで、人は新しく生き始めるのです。生かされ始める。

神の御力によって生かされるということを始めます。

恐れることはない。いつも十字架を見上げればいいのです。

いつも十字架の赦しを信じればいいのです。そこで、神の民は生かされます。

お祈りをいたしましょう。

■ 祈り

人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、24 ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。

■ 静止の時

子どもと親のカテキズム

問47 今(いま)も生(い)きておられる復活(ふっかつ)のイエスさまは、どのようにして礼拝(らいはい)において共(とも)にいてくださるのですか。

答 復活(ふっかつ)し、天(てん)におられるイエスさまは、特(とく)にご自分(じぶん)の恵(めぐ)みを与(あた)える方法(ほうほう)を用(もち)いて、聖霊(せいれい)において共(とも)にいてくださいます。

イエス様は「特にご自分の恵みを与える方法を用いて」、共にいてくださることが教えられています。

す。その方法につきましては、次の問答で「御言葉と礼典と祈り」であると教えられますし、その後、御言葉とは何か、礼典とは何か、祈りとは何か、という問答が続いていますので、順番に学んでいきたいと思えます。

今日、覚えたいことは、それでは、私たちが御言葉を読むならば、礼拝をするならば、祈るならば、そこにイエス様は共にいてくださるのか、ということです。

それは、きっとそうなんですけれども、「聖霊において共にいてくださいます」という文言を大切に心に留めておきたいと思えます。

聖書を読むこと、祈ることは、確かに、わたしたちなすことなんですけれども、その始まりにも、聖霊なる神様の招きがあって、神の御業として、信仰生活が守られているということを知っておきたいのです。その感謝をもって歩みたいのです。